週に1、2回樽川中学校に通う学生SATの鈴木真紗美さん（写真中央・藤女子大学4年生）は「授業以外の場面でも力になれれば」と昼休みも生徒たちと積極的に交流を持ちます

楽しそうに学校に行く姿が親としては一番うれしいですね

保護者

保護者から見た変化と期待

SATのサポートを受けている子どもたちの変化は、保護者の目にどう映っているのでしょうか。

小学5年生の娘を持つ山本由紀（やまもと ゆき）さんは「とにかくSATの先生が学校に来てくれることを楽しみにしているようです。勉強のこと以外でも、今日は何をして遊んでもらったとか、よく話してくれます。学校の中で一番子どもたちに近い存在なのでは」と話します。「今は中学1年の娘が、SATの先生の方が分からないとき質問しやすかったと言っていました」と振り返るのは倉睦（くら むつみ）さん。2人は、SATにはこれからもずっとサポートしてほしいと口をそろえます。

今後期待することは、SATに長い時間いてもらうこと と、SATの人数を増やすこと。「先生と子どもの関係のフォローもしてもらえたら。これは、学校に行く楽しみに大きく影響しますよね」と倉さん。

SATに対する保護者の期待は大きいようです。

SATへの期待を語る山本由紀さん（左）と倉睦さん

■ SAT経験者の累積数は168人！（平成17年3月末現在）

H14年	9人	藤女子大学 7人、地域2人 ※モデル校のみで実施
H15年	87人	藤女子大学41人、教育大学札幌校25人、地域7人、スキー連盟14人
H16年	72人	藤女子大学35人、教育大学札幌校11人、地域12人、スキー連盟14人

教える難しさとやりがいを実感。子どもたちに元気をもらっています

学生・地域SAT

SATの経験から得たもの

現在、32人のSATが子どもたちをサポートしていますが、その経験から何を得ているのでしょうか。

石狩小学校で活躍している木本理可さん（北海道教育大学札幌校大学院生）は、教員になる前に経験を積みたくて参加したSATのリピーター。「子どもへの声掛けの難しさを実感しています。先生方の指導実践を見せていただけたり、いろんな学年の授業に入ることで子どもの発達段階や成長していく姿を見せてもらえたことも良かったです。もっと多くの学生が参加するといいのに」と、得られるものの大きさを知っているだけに、今後、参加者が増えることを期待します。

また、学生に加えて地域に住む一般の方もSAT事業に参加しています。

平成16年から八幡小学校の家庭科などで、野菜づくりや調理実習のサポートをしている竹内喜代子（たけうちきよこ）さんは、そんな地域SATの一人。「土に触れることを喜んでいる子どもたちの姿を見てうれしくなった」と目を輝かせます。

竹内さんが地域SATに登録したのは、八幡小学校が畑を探していると聞き、「自分たちにも何かお手伝いできるのではないか」と畑を提供したのがきっかけ。今では「子どもたちに教えたり、手助けできるのがうれしいし、続けてほしいと言われてやりがいになっています」。

「子どもたちと収穫する喜びを実感しました」と竹内喜代子さん（地域SAT）

SAT事業の今後の課題

今回、取材に同行した地域教育推進室の高井史朗社会教育主事は、「学生SATが効果的な指導補助を行うことができるよう、担当の先生と十分にコミュニケーションを図ることができる工夫が求められていますね。継続して指導補助を行えば、学生もさらに力が付くでしょうし、子どもたちの成長が実感できるでしょう。そういう意味でも学生SATにはできる限り継続的にかかわってもらい、先生や子どもたちとの信頼関係を深めていってほしいと思います。

また、地域の方の学校へのかかわりに対する思いはさまざまです。長い目で見て、どのような形でかかわっていくことができるのか、交流を図りながら探っていき、連携の輪を広げていきたいですね」。

地域教育で大切なことは、地域の皆さんと学校、行政がパートナーシップを結ぶこと。子どもも大人も学び合える学校づくりに、ぜひ皆さんも参加してみませんか？

SAT2年目の木本理可さん（学生SAT）は「教師になる前に経験を積みたい」